

六通貝塚の弥生土器

小林 嵩

1. はじめに

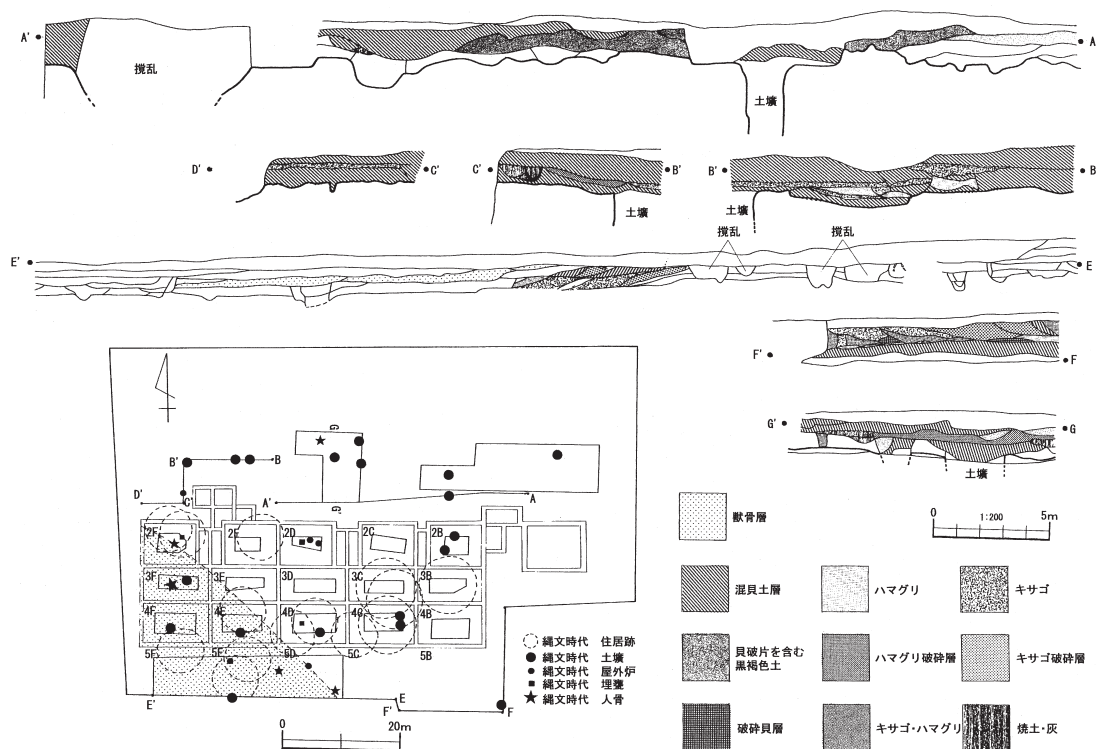
東京湾に面する現在の千葉市は、加曽利貝塚を筆頭に多数の貝塚が集中する地域であり、六通貝塚もその一つである（第1図）。六通貝塚の近辺には大膳野南貝塚や小金沢貝塚・上赤塚貝塚等の縄文時代後期の大型貝塚が集中し、六通貝塚も発掘調査の結果、縄文時代後期初頭～晩期前半の大型貝塚であることが判明し、主体を占める縄文時代後期初頭～晩期前半の土器以外にも縄文時代晩期後半～弥生時代中期までの土器が確認されている（西野 2007）。その他にも幾度かの調査が行われ、今回取り上げる資料は、千葉市教育委員会による確認調査の際に出土したものである（倉田 2003）。この資料は報告後、新たに接合する箇所があったことや、資料の重要性を鑑みて、本稿では紹介を兼ねて再度報告し、その編年的な位置付けや系統を検討したい。

2. 資料の紹介

千葉市教育委員会によって行われた確認調査は貝塚の東側部分が対象であり、5E グリッドの出土で獣骨層からの出土である（第2図）¹⁾。この資料は頸部を欠失し、胴部も部分的に欠失している。器高は残存高で16.2cm、底径は7.0cmを測る。文様構成を上部から説明すると、上部は一条の沈線で三角文を2つ描出し、その下部には上部と点対象の2つの三角文が2条の沈線で描出され、この2組の三角文の上下は一条の横位の沈線が施される。その下部には最上部と同様の構成の三角文が施され、最下部の沈線との間は無文となる。この沈線の下にも一部に一条の沈線が確認されるが、全周しない。この文様構成を1単位とし、全部で3単位施される。文様の描出は全体的にいびつであり、沈線の断面形は三角形となり、深い。三角文内には広義の磨消縄文（原体単節LR）²⁾が施される。



第1図 六通貝塚の位置



第2図 六通貝塚調査区平面図・土層断面図

胴部には全面に縄文が施文され、一部ナデにより消える。内面はヘラ状工具によるナデで調整され、底部はヘラ状工具によるケズリの後ナデ調整である。器形は胴部上半に最大径があり、頸部はナデにより弱い稜が作出される（第3図）。

3. 系統と編年的位置

この資料の系統と編年的位置を検討するために、まず文様に着目したい。文様構成は変形工字文であり、東北地方との関係で考えることができる。東北地方においては、縄文時代晩期末は浮線文が主体となる時期であり、文様の施文手法が沈線化するのは大洞 A' 式以降である。この資料は、極度に簡略化が進んだ変形工字文、無文部に地文が侵入することによって現れる磨消縄文、器形の特徴（高瀬 2000）から、東北地方南部の弥生時代前期末葉の御代田式との類似性が強い（第4図 1・2）。文様帯幅が拡大し、半単位ずれない文様帯の複段化（高瀬 2000・鈴木 2004a）からも御代田式との共通点を見出すことができる。この資料は磨消縄文であるが、磨消縄文が中期初頭の今和泉式ほど発達していないことから、中期初頭まで降らせることはできず、前期末葉の御代田式併行と考えられ、御代田式系統の土器が、房総半島においてやや変容した例と位置付けたい。

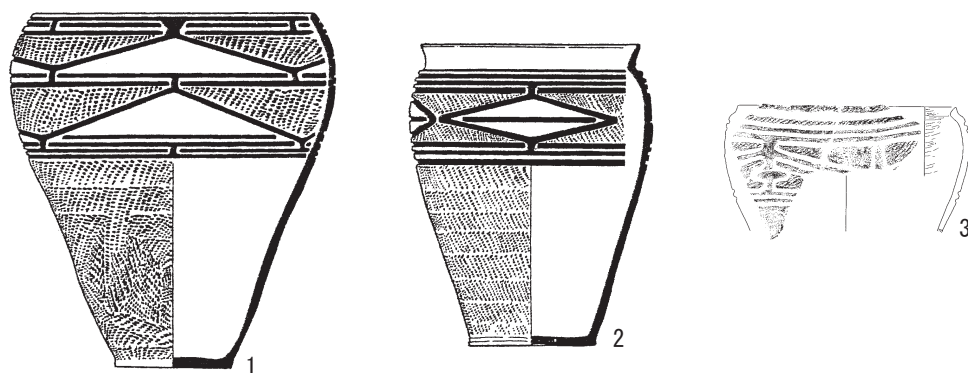
4. 房総半島での編年的位置

六通貝塚の弥生土器は東北地方南部に出自が求められることが分かったが、この資料が房総半島ではどの時期に併行するのか、検討を行う。

東北地方南部の弥生土器編年は、早くは中村五郎によってまとめられた（中村 1976）。その後多くの研究が重ねられ、弥生時代前期についても編年案が出されているが、各研究者間の間で若干の相



第3図 六通貝塚出土弥生土器 実測図 1/3・拓本 1/4



第4図 東北地方南部の弥生時代前期末の資料 1/6

異点がある。石川日出志・高瀬克範は、東北地方南部の該期の土器型式について、御代田式と呼称する（石川 2005、高瀬 2000）。石川は弥生時代中期の磨消縄文の出現過程を検討する中で、御代田式併行の非変形工字文系文様に着目し、非変形工字文系文様を縄文時代晩期末葉から継続して存在するものと指摘した（石川 2005）。石川は御代田式併行期の非変形工字文系文様が関東地方にも分布することを指摘し、房総半島における類例として荒海川表遺跡の例を挙げている。荒海川表遺跡は荒海3式がまとまって出土していることが指摘されていることから（鈴木 2004a）、御代田式と荒海3式に接点を求めている。

一方、鈴木正博は地域的にも時期的にも細分を試みており、一連の論考が発表されている（鈴木 2000・2004a・b など）。鈴木の研究を参考にすれば、作B4式、「一人子式」併行、つまり荒海4式に併行することになる（鈴木 2004a）。大坂拓は本州島東北部の初期弥生式について論じ、北部・中部・南部に区分し、土器型式編年を検討した。その中で、南部の編年案を提示し、荒海4式に併行する土器群を「岡ノ台式土器」と呼称した（大坂 2012・第4図3）。六通貝塚の弥生土器の諸特徴も「岡ノ台式土器」に近似し、大坂の案を参考にすれば荒海4式に併行する。高瀬は荒海式については不明な部分が多いとし、併行関係については結論を保留している（高瀬 2000）。

このように研究者間で意見に齟齬があるが、六通貝塚の弥生土器は荒海3～4式に併行する資料、という点では一致するようである。

今回、六通貝塚の弥生土器の資料紹介を行い、その系統と編年的な位置付けについて検討した。今後議論を深め、弥生時代前期末葉に、東北地方南部の御代田式系統の土器が東京湾東岸に出土する背景について考えていくことが課題となる。

謝辞

本稿を作成するにあたり、多くの方々の御意見を賜った。また、関連文献についても多くの御教示を得た。資料の実見や図化・公表は千葉市埋蔵文化財調査センターに多大なご配慮を賜った。以下に記して謝意を表したい。勿論、本稿の内容について誤りがあった場合、全ての文責は筆者に帰結する。

(敬称略・五十音順)

石川日出志・植木雅博・菅谷通保・田中英世・塚原勇人・佃沙奈・轟直行・長原亘・西野雅人・山下亮介・千葉市埋蔵文化財調査センター

註

- 1) 市内遺跡報告書(倉田 2003)には出土層位の記載はないが、調査時の記録類を確認した。
- 2) ここで用いる広義の磨消縄文という用語については、石川日出志の「土器面に縄文を施したのちに沈線で構図を描き、その一部を磨き消すことにより、縄文部と無文部のコントラストを装飾とする手法」と「施文手順を逆転させて先に構図を描き、そののちに縄文を充填して同様の効果を上げる」という定義(石川 2005)に準ずる。

参考文献

- 石川日出志 2005「縄文晩期の彫刻手法から弥生土器の磨消縄文へ」『地域と文化の考古学Ⅰ』六一書房 pp.305-318
- 大坂拓 2012「本州島東北部における初期弥生土器の成立過程—大洞 A' 式土器の再検討と特殊工字土器群の提唱—」『江豚沢Ⅰ』江豚沢遺跡調査グループ pp.144-181
- 鈴木正博 2000「「砂沢式縁辺文化」生成論序説—「砂沢式」南下と連動した「藤堂塚 S 式」の制定と杉原荘介氏命名「有肩甕」の今日的評価—」『婆良岐考古』第 22 号 婆良岐考古同人会 pp.41-74
- 鈴木正博 2004a「「荒海式」変遷の背景—常磐弥生式前期への移行に観られる文化系統の一断面—」『茨城県考古学協会誌』第 16 号 茨城県考古学協会 pp.67-94
- 鈴木正博 2004b「「境木式」の行方—「荒海 2a 式」から「境木式」へ、そして「弧線文系土器群」や「及川宮ノ西型文様帯」へ—」『婆良岐考古』第 26 号 婆良岐考古同人会 pp.1-26
- 高瀬克範 2000「東北地方における弥生土器の形成過程」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 83 集 国立歴史民俗博物館 pp.61-95
- 中村五郎 1976「東北地方南部の弥生式土器編年」『東北考古学の諸問題』寧楽社 pp.207-248

報告書

- 荒谷伸郎・吉田浩明ほか 2010『一般国道 49 号阿賀野バイパス関係発掘調査報告書Ⅱ 山口遺跡』(『新潟県埋蔵文化財調査報告書』第 215 集)新潟県教育委員会
- 岡本東三・堀越正行・渡辺修一ほか 2001『千葉県史編さん資料 成田市荒海川表遺跡発掘調査報告書』千葉県
- 倉田義広 2003『埋蔵文化財調査(市内遺跡)報告書—平成 14 年度—』千葉市教育委員会生涯学習部文化課
- 西野雅人 2007『千葉東南部ニュータウン 37—千葉市六通貝塚—』(『千葉県教育振興財団調査報告』第 572 集)独立行政法人都市再生機構千葉地域支社・財団法人千葉県教育振興財団
- 馬目順一・古川猛 1970『福島県郡山市一人子遺跡の研究—所謂亀ヶ岡式土器終末期の吟味—』(『南奥考古学研究叢書Ⅰ』)

図の出典

- 第 1 図：西野 2007 を一部改変
- 第 2 図：倉田 2003 より転載
- 第 3 図：筆者作図
- 第 4 図 1・2：馬目ほか 1970 3：荒谷ほか 2010